

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 全国公民科・社会科教育研究会

（代表者 石井杉生 会員数 約1,000名）

T E L 042-661-0444

1 前 文

出題内容は、高等学校学習指導要領に掲げられた教科・科目のねらいと内容に、おおむね即しており、基礎・基本を重視したものとなっている。いわゆる奇問・難問とされる問題は見られず、高校生が学習した知識や涵養した思考力に基づき、考えて解いていく工夫が施されている標準的な問題である。

年々問題作成が厳しくなっていく状況にあって、基礎的基本的な知識の理解とそれに基づく思考力や判断力を問う問題を作ろうとする大学入試センターの努力と意欲を高く評価する。また、そこに大学人としてのインテリジェンスとメッセージも込めなければならず、加えて、高校生が問題を解きながら、自らが初等中等教育で培ったものを大学で更に高めていくことの楽しさやすばらしさを実感できる問題を作成しようという熱意に敬意を払う。それでも後期中等教育の現場にある公民科担当教員としての視点からすれば、いくつかの改善を求める点があることも事実である。例えば、リード文と各問の有機的な関連が欲しい。高等学校の授業において学んだ学習の成果を背景に、それぞれの大きな問でどういう切り口でどういうテーマを扱うかを受験者に理解させ、その文脈を考えることをとおして正しい答えを導けるような問いの作り方を工夫していただきたい。もとより、正しい知識が備わっているかを問うことは大切である。しかし、そこでとどまるのではなく、その知識を使って考えた結果、初めて正解が見えてくる問いの作り方を期待する。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

大問数5、解答数38からなる全体としては、質、量ともに標準的な良問と言える。極端に知識に偏った専門的な用語を尋ねることもなく、思考力や判断力、資料読解力等、幅広い能力を問う。改善を求めたい点は個々に指摘することとして、ここでは全体について触れる。

メッセージ性の高いリード文は「政治・経済」を学習する上で、高校生に大きな示唆となるだけに、その重要性が減じることはない。それだけにリード文を読まなくても知識だけで解ける問いを用意するよりも、リード文を生かした問いを一つでも多く設けるよう期待する。高校生として学んできた基礎的基本的知識の確認も大切だが、習得した知識を活用して解く問題を工夫していただきたい。各大問のリード文が工夫されているだけに、高校生が自らの知識と与えられた状況とを総合的にとらえて思索を深めていけるような問いを期待する。

第1問 国際政治と国際経済に関する課題の一つとしての南北問題に焦点を当てた総合的な問題。

第1問だけに、リード文と問いの内容とをもっと有機的に関連させ、リード文を読み、かつ各問を解きながら、受験者が「政治・経済」の科目としての目標が見えてくるストーリー性を打ち出してよいのではないか。総合的に問おうとして、かえって出題者が萎縮したようにも見え

る。

問1 一人当たりGNIと乳児死亡率の相関関係を示すグラフからインド、韓国、ブラジルを見極める問い。出典を『世界国勢図会 2007/08年版』とし、最新版の『世界国勢図会 2008/09年版』としなかった点に出題者の心遣いを感じる。

問2 発展途上国の現状を知る手掛かりとして人口、GDP、後発発展途上国、南南問題を正しく理解しているかを問う。人口やGDPについてはグラフの読み取りの問いとして出題したいところ。

問3 経済思想についての基礎的基本的な知識を問う。

問4 国連安保理についての基礎的基本的な知識を問う。

問5 発展途上国の動きとNIEO（新国際経済秩序）の樹立に関する宣言について正しく理解しているかを問う。誤りとする選択肢は本来、その文自体は正文でも、この設問の趣旨からすれば正答として選べない設定とするのが望ましい。①～③は選択肢を見ただけで誤りと分かってしまい、リード文を読み、設問の意図を考えずとも正答が得られるのは残念。

問6 冷戦期の国際関係について基礎的基本的な知識を問う。

問7 難民についての基礎的基本的な知識を問う。

問8 国際機関の働きについて基礎的基本的な知識を問う。ただし、国際機関という下線部からこの四つの機関をあげる関連性や、それぞれの機関についての簡略化した記述に違和感を覚える。

問9 日本のODAについて基礎的基本的な知識を問う。

問10 地球環境問題に国際社会がどのように取り組んでいるか正しく理解しているかを問う。

第2問 情報社会の進展と基本的人権に関する問題。情報社会に生きる高校生はともすると便利さのみに注目してしまうが、自分たちのおかれた情報についての環境が人間として生きていく上でどのような課題や危険性を持つのかを冷静に考えさせようという意図がくみ取れる。ただ、このような内容を「政治・経済」として出題するのがよいのか、「現代社会」で出題するのがよいのかは考える必要はあるだろう。出題の意図が新高等学校学習指導要領「現代社会」を見越して、情報社会の便利さという「幸福」を感じ取るだけでなく、「公正」さは保たれるのか、「正義」は貫けるのか、という大切な価値観を示唆しているだけに、「現代社会」において問うべき出題であったような気がする。

問1 表現の自由に関する基礎的基本的な問い。

問2 日本の政治制度に関する基礎的基本的な問い。日本国憲法について正しく理解しているかを問う。

問3 情報社会の現実をどれだけ正確に把握しているかを問う。用語の理解と基本的な情報社会についてのとらえ方を問う。ただし、選択肢の表現については③だけが異質である。

問4 新しい人権についての基礎的基本的な問い。

問5 日本の裁判についての基礎的基本的な問い。陪審員の選択肢を用意したのは、裁判員制度が始まるのを意識したものと思われる。裁判員制度への啓蒙活動によって、第二次世界大戦前の一時期、日本でも陪審制がとられていたことは高校生もよく知るところとなっている。

問6 国会議員の地位に関する基礎的基本的な問い。

問7 ねじれ国会の下、衆議院の優越や再議決に関しては高校生もよく知るところとなった。

常に現実の政治に関心を持ってというメッセージともなった国会の現状に即した基礎的基本的な問い。

第3問 国民の政治参加と民主政治に関する問題。高校生は近年の日本政治の動きから現実政治の動向には関心を高めていたことと思われ、この問題に接することで高校生は社会科学が現実の世の中の動きと不可分であることをあらためて知ることになった。実際には、衆議院の解散総選挙はなかったものの出題者はデリケートな分野での問題作成に苦慮されたものと推察される。

問1 参政権の内容に関する基礎的基本的な問い。

問2 日本の選挙制度に関する基礎的基本的な問い。小学校社会科以来なじんでいる高校生も少なくないはずだ。戸別訪問、重複立候補、選挙区制度、一票の価値などいずれも大切な内容である。

問3 地方自治に関する基礎的基本的な問い。

問4 住民投票に関する基礎的基本的な問い。

問5 地方自治は民主主義の学校と述べたブライスの言葉の意味するところを考えて選ばせる問い。知識で解けるところをあえて考えさせようという意図がある。国語力の問題と言われようとも少しでも工夫してこのように「考えて解く」大切さを高校生に伝えたい。

問6 マスメディアや世論に関する基礎的基本的な問い。④は戦時下のメディアについて想像を働かせれば容易に分かる。知識でも解けるが、ある意味で高校生の持つ知識に想像力を働かせることの大切さを認識させようという工夫が感じられる。

問7 世論調査のデータの読み取り。平易ではあるが、資料を正確に読み取らせることの重要性を訴える意味で、大切な問い。例え通過率が高くても図表の読み取り、地図の活用などは大切と考える。

第4問 労働と暮らしに関する諸問題を、生徒二人と先生との会話文を読みながら考えていく問題。せっかく会話文で提示するのであれば、文章で示すことのできない内容を示すべきだと考える。生徒二人がそれぞれ正論ではあっても立場が異なることで対立する中で、先生が互いの論点を整理しつつ、よいところと限界や問題点を明らかにしていく展開であれば、会話文としての出題が生かされよう。

問1 景気循環についての基礎的基本的な問い。

問2 日本における賃金や就業形態についての基礎的基本的な問い。派遣、年俸制、ワークシェアリング、年功序列型賃金などいずれも平易ながら大切な用語である。選択肢を文にすることで、単に用語の知識を問うことにならないようにしている。

問3 日本の中小企業についての正しい理解を求める問い。技術、政策、従業員数、資本装備率など大切なところを無理なく尋ねている。

問4 公務員が労働基本権を制限されることについての基礎的基本的な問い。

問5 日本の金融についての基礎的基本的な問い。第二次世界大戦後の日本経済の大きな流れを理解した上で、金融について特徴をつかむことの大切さを、訴えている。これだけの内容を大問にしなかったのはもったいない気がする。

問6 日本の社会保障制度について、公的扶助、社会保険、社会福祉、公衆衛生からバランス良く取り扱っている。細かい知識よりも社会保障の根幹にかかわる基礎的な考えをしっかりと理解してほしいというメッセージでもある。

問7 前問問6が日本の社会保障を問うていたことに対応してここでは外国の事例について基礎的基本的な知識を問う。内容は平易で高校生としていずれも知っておかねばならないところである。

第5問 農業に関する問題を扱う。農業問題は「政治・経済」では課題追究学習として扱うことになっていることを意識したリード文になっている。

問1 農政に関する基礎的基本的な問い。農地法、農業基本法、減反、コメの輸入などいずれも知っておかねばならないところを丁寧についている。

問2 高度経済成長以降の産業構造の高度化についての基礎的基本的な問い。それぞれの時代の特徴を大きくつかみ、そこでの課題やそれを私たちがどのように克服してきたのかという視点を持つことの重要性を高校生に伝えている。

問3 需要曲線と供給曲線を示し、条件を説明して、図を正しく読めるかを問う。知識だけでは解けないように工夫しており、図の意味を正しく理解しながら考えていくことになるが、平易な問いである。

問4 為替レートの変動をグラフで示しつつ内外価格差を理解しているか、為替レート計算を確実に実行して比較ができるかを問う。実際は、単純な計算で正解は容易である。

問5 自然環境を意識した農業のあり方を考えさせる問い。

問6 市場メカニズムについての理解を問うが、知識としてではなく市場メカニズムの限界としての事例を、寡占や外部不経済、公共財の配分などとして示し、施策を組み合わせる問いに仕立てている。

問7 消費者保護に関する法制度について基礎的基本的な知識を問う。特定商取引法、新食糧法、製造物責任法、消費者契約法いずれも重要な法律である。